
勇者って知らなかったんですマジ勘弁してください

TT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者つて知らなかったんですマジ勘弁してください

【コード】

N0152Y

【作者名】

TT

【あらすじ】

孤児かと思ったら勇者だったというお話

1話

一言で今の状態を表すなら、転生……。
いや、あれだよ、ビックリだよ！！　なんで？　何があったら転生なんてするの？

そういえば車に轢かれたような気がする、そっか、俺死んでるわ。
納得はした、だがどうすればいいんだ、こんな小さい手になってしまつて。

あと何年かは、恥ずかしいイベントが続くんだよな？　転生の特権の。

「　、　」

あゝ、マイマザー、おはようございます。

相変わらずなんていつているのか分かりませんが、赤ちゃんはお腹の中に居たときから。

言葉を学ぶつて言うけど俺は学んでないようです。が、がんばろう。

「サーシュ

」

サーシュたぶん名前だと思う、母はいい人だと思う、自分がかかり愛されてるつても分かるし。

まあ、願わくばこの平和な時が続きますように。

平和な時を願ったあの日から3年がたった、言葉のほうは微妙だ

少しずつ良くなっているが

まだまだ微妙だ、今は木の陰で本を呼んでいる、本といっても木の板に傷をつけて

文字を書いているだけのものだが、ふと、顔を上げると子供が遊んでいるのが見える。

元気なのはいいことだ、だが一人だけその輪に混じれて居ない子が居る。

はあ、仕方がない。

そう思い、輪に混じれて居ないこの傍に近寄る。

近づいてくる俺に気がついたのか、こちらを見る、女の子のようだ。

「なに？」

おお、聞き取れた。

そうそう、ゆっくり話してくれば俺もわかるんだよ。

「なんで皆と遊ばないの？」

多分きちんと喋れている、と思う。

顔の表情が動かないのはいつものこと、声もすこし平坦だが気にしない。

「私は、だから」

少女はそう呟いた、やばい、知らない言葉だ、発音は分かったけど、なんていったのだろう。

孤児とか、かな？ そ、そういえばこの子の両親は見たことない。それに寂しそうな目をしている。

悪いことを聞いてしまったかもしれない、だがそれが原因で一人寂しく子供たちを見ていたのだろう。

「一人は寂しくない？」

泣きそうな目になる、え、えっと、ど、どうしよう。そ、そうだ
！！

「孤児なんて関係ない、俺と友達になろう！」

その子の手を握って、目を見る、少し慌てて噛みまくってしまったがうまく言えただろう。

泣き始めてしまった。ど、どうすれば、どうすれば

「大丈夫だよ、孤児なんて関係ないんだ、ずっと、ずっと、俺の友達だから」

慌てた俺は抱きしめることにした。

女の子が泣いたら抱きしめる、大切なことだと思えます。

泣きつかれたのか女の子は寝てしまった。

取りあえずこのままだといけなれないと思い離れようと思ったのだが、女の子が服を握っているせいで離れられなかった。

仕方ないのでそのまま大変だが抱き上げて最初に居た木の場所まで移動した。

移動したら疲れたので気にもたれかかって寝ることにした。寒くなりそうなので女の子に服を掛けてあげる。

もぞもぞと何かが動いている感じがする。

「う、ん？ あ、起きたんだ」

「は、はい、えっと」

む、どうしたのだろうか？ あ、そういえば。

「名前は、サーシュだよ」

「わ、私はアリアです」

へえ、アリアって名前なのか、可愛い名前だな。

「アリアだね、よろしくね」

そういって、頭をなでる、俺も今は同じくらいだけどやっぱり子供は可愛いと思ってしまう。

「はい、よろしくお願いします、サーシュ様！」

いい子、いい……子？

「様？」

様？ なぜ？ いや、女の子に様づけで呼ばせるってどんなだよ
！！

「だ、駄目ですか？」

1話裏

私は一人だ、私は勇者だから、強いから、一人でいい。

そんなことを思いながら、同世代の子供たちが遊んでいるのを見る。

そうやって、子供たちを見ていたら近くに人が来た、笑ったところを見たことない、よく村長の家で本を写させて貰っている無愛想な子だ。

「なに？」

なんだろう、そう思って聞いてみた。

「なぜ皆と遊ばない？」

私は勇者だ、だから一人でいい、また私は心の中で唱える。

「私は、勇者だから」

そんな呟きがもれてしまった。

その呟きが聞こえたのだろう、その子が何か考え事をしている。

お母さんかお父さんに言われたことを思い出しているのかもしれない。

あの子とは遊んではいけないと。私は強いから、強いから大丈夫、唱える、唱える。

「一人は寂しいだろ？」

関係ない、関係ない、一人でいい、私は勇者だから。

「勇者なんて関係ない、俺のものになれ！」

驚いた、上から物を言う子だと思っていただけ。
手を握られて、目を見つめられて、人の手ってこんなに暖かかったんだ。

そう思った瞬間涙があふれてきた、今までこんな風に手を握ってくれた人は居なかった。

「大丈夫だ、勇者なんて関係ない、ずっと、ずっと俺の……だ」

そういって、抱きしめてくれた、涙が止まらない、凄く暖かくて暖かくて。

自分のないている声で、少し聞こえなかったが、私はずっと、貴方の傍に居ます。

泣いて疲れたのか眠ってしまっていた。

暖かい、暖かい？ 少し体を動かす。あの子が木にもたれかかって寝ていた。

私はあの子にしがみ付いて寝ていたみたいだ。暖かかったのは、あの子の上着が掛けられていたからだった。

「う、ん？ あ、起きたか？」

「は、はい、えっと」

そっぴえは名前を聞いてない、どうしよっ？

「名前、サーシュだ」

「わ、私はアリアです」

サーシュ様、ああ、サーシュ様、これからよろしくお願いします。

「アリアか、よろしくな」

そういつて、サーシュ様が頭をなでてくれます。

ああ、幸せです。

「はい、よろしくお願いします、サーシュ様!」

「様?」

サーシュ様がこちらを見る、ど、どうしよう、何か間違っただろうか?

「だ、駄目ですか?」

「いや、悪くない、悪くないぞ!」

そういつて、抱きしめてくださる。

ああ、恥ずかしいです。サーシュ様//

2話

さて、いつまでも抱きしめているわけにはいかない。そろそろ日は沈んで、あたりが暗くなり始めている。

「アリア、君の家ってどこ？」

家の場所を聞く。

「あそこです、村長の家の隣の隣です。」

あそこか、人が住んでないと思ってたんだけど、あそこに住んでいたのか。

一人で住んでいることは確定だな、どうするべきか、子供のうちからひとりで生活なんて寂しすぎるだろう、ならばやることは一つだ。

「アリア、ついてきて」

アリアの手を引いて家に帰る。

「ただいま」

帰りの挨拶をする。

「あらあら、お帰りなさい、いい？」

母さんはこちらを見て固まる、それはそうだろう、子供が家に帰ってきたと思ったら。

どこの子か分からないが連れて帰ってきたのだから。

「サーシュ、その子は孤児……よね？」

ためらうように聞いてきた。

知っていたのか、いや、大人なら知っていることなのかもしれない。

このままでは、アリアを家で暮らさせることが出来ないかもしれない。いや、そんなの駄目だ。

「母さん、孤児とかそんなことどうでもいいんだ、アリアは子供で、俺と同じ子供なんだ

だから一緒にいてあげるんだ、だから！」

母さんはなんだか衝撃を受けたような顔をして、その後少し泣きそうな顔をしながら。

「そうね、そうよね、子供だものね」

そういって、母さんが近づいてきて、アリアと一緒に抱きしめてくれた。

アリアは泣いている。

「アリアちゃん、でよかったかしら、ごめんなさい、私たち大人が間違ってたわ」

「そ、そんなことないです」

「ふふ、アリアちゃんは、いい子ね」

そういつて母さんはアリアの頭をなでている。
なんだか、一件落着いたようだ。

「母さん、アリアと一緒に暮らしてあげたい、どうにかできないかな？」

「そうね、分かったわ、明日、村長さんと話しをしてみるわ」

これで、どうにかなりそうだ、そういえば他にも孤児はいるのだろうか？

いや、今考えても仕方ない、今の俺じゃあどうすることも出来ない。
い。

いつか、孤児院を開ければいいのだけれど。

「そうだ、お腹すいてるでしょ、準備できてるわ、アリアちゃんも一緒にどうぞ」

「え、あ、えっと、でも」

アリアはもじもじして、こちらをちらちら見てくる。

「母さんが、いいって言うてるんだから、いいんじゃないの？」

「は、はい、サーシユ様／＼」

「え？ ちょっといいかしら、サーシユ」

そういつて、母さんは手招きする。

「なに、母さん？」

「ねえ、何で様づけなの？」

ああ、そのことか。

「アリアがそう呼びたいって言ったからだよ」

「そう……まあ、お母さんは、何も言わないわ」

地味にありがたいな。

「アリアちゃん、ついてきて、一緒にお食事しましょ」

「は、はい、お、お母様」

「アリアちゃん、そんな他人行儀名呼びかたしなくてもいいのよ？
お母さん、て呼んで？」

「あ、えっと、お母……さん」

「うふふ、よろしくね、アリア」

アリアは母さんに連れられていく。その顔は笑顔だ。
俺もそれを見ながらその後が続く。

二人でアリアを挟んで食事をした。

アリアはきれいに食べていた。俺が言えた事じゃないが、本当に三歳児か？

そんな感じで食事が終わり。

いまは、アリアと一緒にベッドで寝ている。

今日は疲れた、外で寝たとはいえ子供には足りなかったようだ。

「アリア、おやすみ」

アリアを抱きしめる。

「はい、おやすみなさい」

そうして、一日が終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0152y/>

勇者って知らなかったんですマジ勘弁してください

2011年11月2日14時14分発行